

日本ジオパーク・モデル化研究会の当面の活動概要について

2007年8月に日本ジオパーク・モデル化研究会を設立し、対面会議（月1回程度）や現地集会などを開催し、活発な研究活動を開始しております。今後、全体的なアクション・プログラムを策定しますが、当面、次のような活動を行います。

1. 事業化モデル研究

本研究会は、地域の固有性・独自性に基づく日本版ジオパーク（J-GEOPARKS）の基本概念に沿って“ジオ（GEO）”の視点とジオパークの“ストーリー性”を大切に、モチーフ（主題）と事業化モデルを明確にします。そのため、ジオパークを構想し具体化していく過程において明らかとなる諸問題・課題について議論を重ね、方策を見いだすことを狙いとして事業化モデル研究を実施します。

地域資源の特色に基づいて現在、次の3地域を研究しています。

【広域地質・文化遺産モデル】：四国モデル

【東アジア圏文化交流モデル】：北海道白滝黒曜石遺跡モデル

【広域地質構造モデル】：関東山地秩父モデル

2. PR・啓発活動

パンフレット、『日本版ジオパークとは何か（仮題）』など図書出版物、Webサイトなどによって広く国民や関係者に周知します。シンポジウム、フォーラムなど研究集会を開催（対象地域開催）して、広く意見交換を行うとともにPR活動を実施します。

3. 集客ビジネスモデルの提案と支援

ジオパークは、広い意味でのビジネスを伴わなければ継続、発展は困難だと認識しています。地域資源や既存インフラの分析・評価に基づいた集客ビジネスモデルを確立することが大切です。

4. 関連活動

(1) 『日本の地質百選』

『日本の地質百選』は個別地点において学術的・文化的に、その公開と保全が求められる地質サイトを対象とした情報発信モデルと言えますが、ジオパークは、さらに踏み込んで、組織・施設・資財をともなう社会的・実体的な集客ビジネスモデルです。もちろん、『日本の地質百選』の地質サイトやその候補サイトはジオパークの有力サイトであることは言うまでもありません。

(2) 『日本地質の日』制定広報・普及

(3) 『都・道・府・県石、市・町・村石』の制定

(4) 調査・研究

①『ジオクオリアの分析とジオセラピーの提案』：人間は「大地」から何を感じ取り、どう影響され、また、癒されるのでしょうか。

②気候変動：地球環境が向かうのは果たして温暖化でしょうか、寒冷化でしょうか。人口爆発と資源・エネルギー枯渇、人類の叡智は気候変動とどのように絡むのでしょうか。

③市民に対する“自然と人間のかかわり”の説明手法：日本版ジオパーク（J-GEOPARKS）の精神的支柱となっている“自然と人間のかかわり”について“ジオ（GEO）”の視点からの系統的・総合的理解と市民に対する説明手法についての研究が必要です。従来の総花的な理解や説明を克服していく必要があります。

④ジオツーリズム：人々が自らの明確な意図とテーマをもって現地を訪れ、楽しみ、学び、体験するエコツーリズム、グリーンツーリズム、産業ツーリズムなど先行的なツーリズム手法の分析とジオツーリズムへの導入が必要です。旅行会社とのジオツーリズム試供品の共同開発も必要でしょう。

参考－1 ジオパーク整備で考慮すべき要素

1. 事業規模・領域サイズ

(1) ナショナル・ジオパーク：国立公園サイズ(世界ジオパーク)

(2) リジョナル・ジオパーク：都・道・府・県サイズ

(3) タウン・ジオパーク：市・町・村、地区サイズ

(4) ガーデン・ジオパーク：道の駅サイズ

(5) ポケット・ジオパーク：大露頭とその周辺

(6) ワンポイント・ジオパーク：小露頭等

(7) ルート・ジオパーク：ネットワーク（地質街道）

2. 事業形態

(1) 設立者、事業主体、整備予算確保

(2) 運営組織・形態、財源確保（ビジネスモデル／財政的自立）

3. 管理形態

領域の管理形態によって開放型と囲い込み型があります。囲い込み型は出入管理のためコストが必要です。何れも土地所有者や管理者、地域の人々の協力が必要となります。

4. 施に設形態

徹底した既存施設、他事業との連携・活用が必要です。

- (1) 単独施設（ジオパーク単独の施設）
- (2) 複合施設（他事業・他目的施設との複合・共用、主・従・依存／間借りなど）
- (3) 重複施設（他事業・他目的施設への機能付加、二枚看板）
- (4) 連携施設（他事業・他施設／同種・異種との連携）

5. インフラ整備

徹底した既存インフラの活用と情報化による低コスト化を図る必要があります。

- (1) 情報発信：地質など“自然と人間のかかわり”に関する情報資料，現地説明板，地質・自然博物館
- (2) 露頭整備：掘削・更新，安全対策
- (3) ルート整備：地質観察路（遊歩道，登山道），道案内・標識など
- (4) サービス施設：ジオパーク領域内・間道路，駐車場，トイレ，売店など
- (5) 各種体験施設：体験型メニュー開発・整備，“地質塾”
- (6) 管理施設：管理棟
- (7) 宿泊施設：既存インフラ利用

6. ジオパークを支える人材

地域ボランティアの養成と協力が不可欠です。

- (1) “学芸員”／ジオコーディネーター
- (2) “山守”／ジオサポーター
- (3) “案内人”／ジオナビゲーター
- (4) “こどもジオクラブ”と“ジオレンジャー”
- (5) “ゴールド・ジオクラブ”

参考ー2 『日本の地質百選』の選定結果と今後について

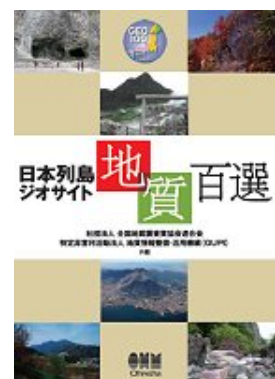
2007年3月、「日本の地質百選」の第1期選定分として83箇所が選定されています。この83箇所は、全国より寄せられた自薦他薦による約380箇所の候補地から選ばれたものであり、日本の地史を理解するのに欠かせないなど学術的観点とともに、観光・教育といった観点も加味した上、選定されています。

1. 選定の観点

- (1) 地質学上、世界的に貴重な地質事象（ジオパークの候補地を含む）
- (2) 日本ならではの地質事象
- (3) 地質を反映した特筆すべき地形
- (4) 観光資源として有用な地質事象
- (5) 破壊の恐れがあり、保存すべき地質事象
- (6) 地域住民などに親しまれ、適切に保存されている地質事象
- (7) 身近な地質事象で地学教育に資するもの
- (8) 日本の産業発展に寄与した鉱山跡地など

2. アウトプットと今後の展開

- (1) 解説書発刊：『日本列島ジオサイト 地質百選』2007年10月 オーム社（社）全国地質調査業協会連合会・(NPO) 地質情報整備・活用機構共編
- (2) マスコミ：業界紙・一般紙・放送局への広報
- (3) 自治体：ツアーガイド（看板，人材）の整備支援
- (4) 教育機関：小・中・高校野外教育，大学地質実習ガイド
- (5) 観光・地域活性化：観光資源，ジオツーリズム素材の発掘・ブラッシュアップ
- (6) ジオパーク：日本版ジオパーク（J-GEOPARKS）への推薦・世界ジオパークを含めた広範囲な日本版ジオパーク整備の素材を提供
- (7) 地質広報運動：『日本地質の日』・『都・道・府・県石，市・町・村石』制定・広報運動などとの連動・一体化



2007年10月 オーム社